
現実の王冠

tasogaremono

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実の王冠

【Nコード】

N6786Z

【作者名】

tasogaremono

【あらすじ】

武州で一人使い手が死んだ。其の時少年は決断を迫られる物語が始まり、時の歯車が回りだす。善か悪か その答えは・・・

＊この物語は、ものすごく叩かれた超不人気作者であり、4Dの世界で厨二病疑惑しかなく、なにをやってもすべて不幸に転じるこの私が初めて公開する完全オリジナル物語です、どうぞ白い目でお読みください。ちなみに超不定期です

世界の仕組みと高校生

御守靈みかみりようそれは、幽霊であり、人間と交わることができる霊、そして、あらゆる分野で活躍している人間の相棒であり、また御守靈みかみりようは人間の相棒である、互いの相互関係によって成り立ってきた世界、その世界には、いくらかの国があった、

独特の文化と歴史を持つ尖山中仁の文化を一部受け継いだ武州、4つの地方からなる立憲君主制国家のイングラスコッティア王国、共和制国家であるマッシリアフランソワ、共和制国家のイータルサウニウム、

尖山中仁とほぼ同じ大きさの土地を持つ大統領共和制の二院制の国家レーテアウル、

レーテアウルの北部に位置する連邦立憲君主制国家バイデルカナデア、世界最高人口を誇る尖山中仁、

そして、国際不可侵の土地である極時大陸

6つの国からなる、もう一つのどこかにあるだろう地球

我々と変わらない暮らし

我々と変わらない食生活

我々と変わらない産業

我々と変わらない土地

我々と変わらない姿

我々と変わらない光景

我々と変わらない世界

我々と変わらない天気

そこにはテレビもあれば電車もある、車もあれば飛行機もある、空もあれば星もある、朝もあれば夜もある、森があれば海もある、一

般的な都会があれば秘境もある、戦争があれば革命もある、人もいれば動物や魚もいる、手もあれば足もある、顔があれば体もある、善人も入れば悪人もいる、貧乏も入れば金持ちもいる、文字もあれば数字もある、踏みにじるものもあれば踏みにじられるものもある、そんなただの世界

その世界は少し変わっていた、それは、ごく普通のみじかな存在に空想と言うものが実現化し存在した世界

だが、それはなかつとことにされた世界でもあり、実在し今でもあるところでは繁栄しているとされている世界

普通の高校生

そんな中でのそれはなんだろう、友達がいる、彼女彼氏がいる、やる事が決まっている、いつもが退屈ではない生活を暮らしている何かと多くトラブルに巻き込まれやすい体質であったり、野球など何らかのスポーツ活動に激しく熱中していたり

この世界の学校は違うものだった

学校間生徒対立抗争 (School of School)

アバステイア

各学校には御守霊使いや御守霊使いでなくても戦闘用の仮想霊体を用いて戦闘を行う。

その勝敗によって、各学校間での問題を解決する、それは領域抗争や、生徒間での些細なことから、生徒会同士でのこともある。故にこの世界では学校は一つの組織として成り立っていた

たいていはそんなもんだろう

「はあゝ退屈だ・・・」少年はそんな風に行った
そんな物語である

朝日が窓から差し込み、目の前にいつもと同じ光景

「（朝か・・・）」

重苦しい体に鞭を打ちながら、その朝は始まった

居間に響くのは、何かを焼いたり、切ったりする音

『先日、花月市で御守^{みかみりよう}霊使いが襲われる事件がおこりました、現在容疑者は逃走中、事件現場周辺では緊張した雰囲気^{きふうき}に包まれています』

「（花月市ねえ・・・俺の学校の近くじゃん、めんどくせえ）」
少年が暮らすのは武州のとある県のとある花月市というところ
少年はテレビのニュースを見ながらベーコンエッグにトースト、少
しの野菜の朝食をつくり、ほおりこむ

「んじゃあ、いつてきまーす」

髪を整え、誰もいない家に挨拶を告げ鍵をかけ、俺は学校に向かった
ただ何も考えず、ただ何も感じず、俺は自宅の階段を降りる
駅に向かって歩く

俺の住まいはただのボロアパート、何もないふつうのボロアパート
での一人暮らし

行く間の道には、猫が怪しく泣いていたり、悠然とカラスがゴミ箱
をあさっていた

ただ電車に乗り少し離れた学校に向かう、駅に着き、同じ学生たち
と思わしき集団と共に乗車する

「にしても、今日は暑いな」

今日は夏真っ盛り、しかも今日の気温は23℃
うだるような暑さ、コンクリートからの照り返しが暑い
電車に降りた途端からその熱波に押しつぶされそうになった

毎日登る山道、まさに早朝ハイキングコースとはまさにこのことだった。

今日は真夏日

「（この俺に、死ねと？死ねと言ってるのだな？この魔の坂め！）」
心の中で虚しいツツコミを繰り返しながら黙々と坂を登る、そのたびに、背中から汗が流れ落ちた
耳元のイヤホンから洋楽が絶えず流れていた

「うーっす」

「よお、ヒロー」

「よお、小松ー」

教室に入ると数名の女子と俺の親友である小松靖道がいた
俺は自分の席に向かいながら

「嫌な気配しかしいなあ・・・」
そう思いながら、授業は始まった

誘拐DEATH

俺はただ歩き、ただ電車に乗り、家に何も考えず向かっていった

「・・・」

俺は周りを確認する、どうやらこれは夢でも幻想でもなく、ちゃんとした現実である、しかもなんども場所を確かめてもここは俺の家のアパートの前だった

「(怪しすぎだろ・・・)」

俺のアパートの目の前に止まっているのは黒のいかにも怪しい車

「(誘拐、襲撃、昨日の事件と同じ犯人だとしても・・・大胆極まりないしな、絶対めんどくさいな)」

ものすごく問題しかなかったし、関わりたくなかった

その中から出てくるのは、

黒サングラスで大体はわかるがどんな顔かわからないこんな真夏なのに黒いスーツを着た女二人組、いかにも暑そう、そして、めんどくさそう

「(痛々しい・・・しかも、暑そうだな)」

そんなことを思いながらその二人をスルーしようとする

着実に俺の方に無言で近づいてくる二人組

一人は、肩まである黒く長い髪

もう一人は、口元が緩んでいる

「・・・ヤバくね？」

俺が危機を察知し、自分のカバンを自分の部屋のドアに向けて投げ

つける、そして、それと同時に右足で加速を付け一気に走り出す
とするが

「(早い・・・!)」

俺は咄嗟に後ろ向きに走り出す、いろいろなものを踏み跳躍重視の
疾走を作り、逃げようとするが
そして、

「(右足ボディーブロー!)」

口元が緩んだもう片方の女性がものすごい速度と共にボディーブ
ローを放ってくる

「グフッ!」口元から多少血がでるものなんとか堪えられる程度
のもので、蹴りと同時に飛ばされる

後ろに回り込まれ、手を押さえ込まれる、関節技で半端なく痛い

「(捕まった!)」

そのまま抵抗できぬまま、車に連れ込まれ、自分の家の前から出る

「(誘拐されたー!)」

後ろに見える家がだんだん小さくなっていく、そして、俺の隣にい
た女性がサングラスを外したとき、俺はその人物にもものすごくがっ
かりした

そして、隣にいた女性が俺に向けてこういった

「やあー! ひっさしぶりー! 学生生活 enjoy しているかい? 少
年?」

ものすごいレベルでのがっかり、やっぱりじゃないけど、なんと
くそう思った気がするのであった

「少年じゃないでしょ? 美雨姉さん」

「いやゝ久しぶりに呼ばれた気がするわゝ」

明るいその女性、しかも運転している方の女性は

「お久しぶりだねゝヒロちゃん」

「ああ、お久しぶりです、明美姉さん」

そう言いながら運転する女性

二人とも、よく知るといふか、もはや家族同然の存在、二人とも小さい頃から世話になった姉妹で彼女たちは本家である、篝火流本家の分家である篝屋家の姉妹で、俺の母親の姉の子でいとこに当たる存在、だがその母親の姉さんはアメリカに行って仕事してて、小さい頃といふか、数年前までは俺の家に3人一緒に住んでいたのである。その頃に家事の技術が上がったことは言うまでもないことで、最近では”もうお前ら3姉弟になっちまえよ”と言い出した母親がいた。しかも、羨ましいといふかけしからんといふかなんといふか、二人ともそれなりのスタイルの持ち主で芸能界にスカウトされかけたこともあるくらいの持ち主なのである、しかし、家事ができないという反面を持つ、だから、最近は一週間に一度掃除に向かってるのである、ちなみに年末年始とお盆は基本的に一人暮らしの俺の家で過ごしているのである。

自分でも訳が分かしいといふくらいの解説を行いながら

俺は周りの風景を見ながら

「で、姉さんたちいきなり俺を捕まえてどうかしたんですか？」

「ちょっと、本家から呼ばれちゃってね？」

「で、例のごとく捕まえに来たと？」

「そゆことゝ」

そう言いながらも車は高速道路に乗って本家である東山羽陸地方の火岩という場所に向かって行った

そんな中、車内で

「あつ、そうそう、家が汚くなったっていうか、手に負えないから」

「ああ、言わなくてもわかってるっすよ、土日に向かいますね」

「どもゝ役に立つゝ」

どうも俺の立場的に週一家政婦？になってる気がする

例えばこういうことがある

クリスマスになれば

「ねえゝクリスマスゝ」

「ケーキですね？わかります」

正月になれば

「正月だゝ」

「おせちですね・・・」

大晦日になれば

「大晦日ゝ」

「お雑煮ね、今つくる」

夏になれば

「夏だゝ！」

「そうめんでいい？」

そんな感じの生活が続いていた、驚くべきは小学校の頃

「ええゝと・・・」

教師はその場の現状に困り果てた

明らかにそこにいるのは高校生、場違いなほどの高校生、といって
も少し大人っぽかったからバレてない？多分本人たちはバレてない、

私服だし

「どうもーお迎えにきましたー」対応に出るのはこの時高校生であった明美姉さんと期末テストで早く学校が終わったから明美と一緒に来た美雨姉さん
今日は、防災なんとかで親子が迎えに来るのだが、なぜか美雨姉さんと明美姉さんがいた

「ご親戚か何かで？」

「弘道の姉でーす」

「はぁ・・・」

言葉につまる先生

そんな中、ランドセルを背負い帰りの支度をしていると

「おい、弘道？あれ、お前の母さん？」

「うーん、ああ、姉さんたち」

「・・・」

絶句する少年、彼こそ小学生以来からの友人である小松靖道、この頃から主人公のことを慕っていた

「絶句してどうしたんだ？珍しいことじゃないだろ？」

「珍・し・い・わ！ボケー！大体な、ここいら辺で有名のあのおふたがたがまさかのお迎えなんてしかも一人に！珍しいとしか言いようがねえよ！」

ものすごい高いテンションレベルでツツコミをいれる靖道、言う通りこの頃から目を付けていた芸能各社が多数いるほど有名だったのであるお二人は

「しかも、使い手だぜ、ここいら辺でも有名な、焰龍と氷龍の使い手なんて見たこともねえし、聞いたこともねえ、そんな二人だぜ、テンションが上がらなくてどうするよ？」

ちなみに焰龍を使ってるのが美雨姉さんで氷龍を使っているのが明

美姉さんである

ちなみに焰龍の姫と氷龍の女王と呼ばれていたのはこの時、二人とも知らないことである

そんなふうに話していると

「帰るよーヒロー」

明美姉さんが手招きしていた

「OK」

そういうなりランドセルを担いで靖道に別れを告げて出た

終始、通学路では色々囁かれていた、その翌日学校では、超有名姉妹にまさかの弟？と言う格付けになっていた

「・・・で？明美姉さん、美雨姉さん？」

「「な」に？」

「お母さんは？」

「仕事？」

「その時って、一人で帰るんじゃないの？」

美雨姉さんが親指をサムズアップして

「大丈夫だ、問題ない」

「（問題しかねえええ！）」

まったくもって、問題しかなかった

「んで、まあ、来てくれたのは嬉しいな」

適当にお世辞を言っておく

そういうと、明美姉さんが

「ああ、そうそう、お母さんなんだけど、仕事でこれないからっていう理由で私たちに委託したわけよ」

「へえー（このやろおおお！）」

とりあえず、問い詰めなければ（色々な意味で）ならないことが増えた気がする

母親は、姉達に似て天真爛漫な性格で、姉達とも仲が非常によい

「（まあ、いつか）」
そんな感じだった

過去を振り返りながら、窓を眺めていると、東山羽陸地方に入った
周りの景色には山が多い、むしろ山しかない

俺は起きているのに隣の美雨姉さんは俺によりかかるように寝ている

「いやーヒロー毎回申し訳ないねー」

「まあ勉強になりますし？」

「夜の？」

「いいえ、違いますけど」

あまりの言葉に驚愕しながらも毎度のことだと思いサラッと流す
そんな中、車は山の中を進んでいった、ただ一つあるとすれば、姉
さんの目付きが真剣になり

「……姉さん？まさかとは思うけど。ここでは……」

「さあて。そろそろ行きましようかね」

「……どうかお手柔らかに……とは行かないだろうね」

明美姉さんは、都会では最高に安全なドライバー。

そう、都会では

そんななんにも変わらない声と共にものすごい速度で目を覚ます美
雨姉さん、そして

「んじゃ、舌嚙まないようにしねえとな」

「ええ」

山の中に悲鳴がこだました

明美姉さんの車が山道のカーブでドリフトし始めた、危ないった

らきりが無い、むしろ危ないといかない。運転席では物凄く真剣な顔をした明美姉さんがハンドルとブレーキを颯爽とさばっていた。右に投げ出されると思えば左に投げ出される、まさに地獄それから、いつもなら高速道路降りてから40分くらいのところを20分くらいで到着してしまった

「ヤベエ・・・吐きそう」

「大丈夫？」

美雨姉さんはなぜか耐えられたみたいだが、俺は久しぶりすぎて耐性が付いていなかった

俺は重苦しいドアを開けていき、中に入っていく

長い廊下を歩いていくと、30畳はある大広間に出る、そこには分家の人や本家の知り合いなどたくさんいた

「おっ、来たきた」

中央の上席にいるテンションが高いこの白髪白ひげの老人こそ、篝火流本家30代目当主篝火大和、俺のおじさんちなみに年齢は80才ぴったし

「おひさしぶりじゃな、ヒロ君？」

俺は正座してその頭首と対面する

「お久しぶりです御館様」

「ああ、堅苦しい挨拶はなしじゃ、ほれ、皆のもの集まれ」

そういうと中央の当主の直角になるように本家の人と分家の人、もちろん俺も正座その隣に明美姉さんと美雨姉さんが座る

「ああ、皆も分かったのとおりじゃが、我らが管轄する祠の結界が異常をきたした、そのため、もう一度封印を行う、儀式を行う日は明朝、皆のものそれまで解散じゃ」

広間がものすごい緊張した雰囲気になる、母親によると祠には武州でもそれほど数が少ないとされている封印指定のかかったとてつもないのがおり、それを沈めるのが我々の役割だというらしい
ちなみに、このことは武州政府は知らないことで、これは内密に行わなければならない、そのために実行時にはより一層の警戒が必要とされる

「で、担当なんじゃが」

そういうとなにやらボールペンで書かれた紙を取り出し

「ええ」と、黙々と担当を読み上げていく、その間終始退屈な俺、今回の役割はどうやら姉達の補佐らしい

自分の役割を確認したと同時に本家に戻っていく面々

「・・・これだけ？」

「そうよ、これだけ、ちなみに、今日泊まっていけってお母さんから言われてるわよ？」

「んで、部屋は？」

「おばさんの話によると3人一緒らしいよ？」明美姉さんがなぜかわからないが俺の荷物を持っていた

「マジか？（風紀委員！どこかに風紀委員はいないか！？）」

まさかの部屋が3人一緒、しかもこの年齢、犯罪の臭いしかしい、とりあえず文句は言えないので渋々部屋に行く

「んまあ、ご定番のこの部屋ですか」

毎度おなじみというか、もはや見知った部屋だった
ドアが開く音と共にそこに入ってくるのは

「ヒロ〜いるかい〜」

美雨姉さんだった

「どうした？美雨姉さん？」

「ああ〜ちよいと来てだつて〜」

「本家の人が？」

「そう」

「Ok」

そういうと美雨姉さんに連れられ本家の大広間に向かうと、既に夕食の用意ができていた

広間には、大量の食事唐揚げから、煮物まで数が豊富だった

「久しぶりだし、今宵は宴じゃ！」

この当主は緊急事態おじさんなのに何言ってるんだろうと思いつつながら俺はご飯にありついた

終始、酒が入り、二人とも俺だけに絡んでくる、とても困る、そうとても困る

俺はそのあと、酔いつぶれた二人を布団に寝かす、そして、俺も布団で寝ようとしたら

「（布団がない・・・だと・・・）」

布団が二枚しかなかった、これはよかったもし、二人が正気状態だったら、絶対俺は布団で寝かされどちらかが俺の後ろまたは前で密着した状態で寝なければならぬ状態になっていたのである

「んまあ、結果オーライなのかな？」

とりあえず、誰も部屋には入れないように、少し小細工をかけ、俺は台所にいるお婆さんのところに向かう

「ああ、お婆さん？」

「なんだいヒロ君？」

台所ではお婆さんが明日の朝食の下準備をしていた

「少し夜風にあたってきます」

「いってらっしゃい」

そういうと身近にあった布をかつさらいむかった

この時、少年は知らなかった、まさか、あんなことになるなんて、思いもよらなかったことを

始まりの夜と出会い

ヒュルルル、夏の夜風が気持ち良い

「（こんな日は、あの場所から星でも眺めようかな？）」

俺はそのまま、山道を進み、いつもというわけではないが夏によく星が見えるちいさな広場まで向かっていった

時間も確認しようと思ったが携帯電話を家においてきたらしい

ここいら周辺は都会の光が入ってこない場所で、山の中だから天気が良いとかなりたくさんの星が見える、まあ、言ってしまうと田舎だからよく星が見えたといったところだ

ペガサスに、オリオン、それに北十字、北極星、金星、火星、天の川、俺の視界すべての星が綺麗で幻想的だった。

ここは俺も知らない祠、今回早朝に行く祠は、これよりもうちよつと山の上にあるはず、ちなみに俺は、その祠の近くの石がちょうど良い枕と同じ高さだったので持ってきた布を石の上にかけ枕替わりとして横たわり、星をしばらく見て物思いに耽ったあと、少し目を閉じた

それから数時間後、俺の感覚が正しければ深夜2時位だろう、草木も眠る丑三つ時

ふわりとした感覚の後、俺はふと目を覚ます

目を覚まして俺に膝枕している少女に驚いた、星明かりで照らされる中、その女の子はいた

「・・・どうも」

なぜ、こんな言葉が出たのかわからない、なぜだろ、自分自身に問い詰めてもわからなかった、頭にはたしかに温もりがあった。そして、その子はニッコリと笑った。

年齢的に見て俺と同じくらいだった。瞳の色は透き通って曇りひとつない黒で明美姉さんや美雨姉さんに負けないくらい可愛い顔立ち、黒く長い髪に経帷子キョウウカタビラを着ていて、華奢な腕が俺の頭やおでこあたりを優しく撫でていた。

「（あれ、俺いつのまに寝たんだ？）」

相変わらず、笑顔で俺のことを撫でてくるその女の子

すると不意に「ちょっと我慢しててね？」と声がした。だが彼女がしゃべった様子は無い。

「（何を？）」そう思った瞬間、ぬくもりと共に金縛り状態になる四肢がまるで満足に動かせなくなる

それと同時に女の子の右腕に現れた赤い玉に、物凄い量の言が何かの術式を組み込むようにその赤い玉の中に収束されていき、それはやがて赤い光となり

その光が俺の体の中に入っていくと同時に

イナズマのように激痛が走る、それと同時に激痛が体の中を貫いた、それは拒否反応と言えるべきことだった、しかしやがて痛みは引いていく、そのたびになぜか背中と左腕が虫が背中にははいったように痒かった

そして、俺の意識は瞬間的に途切れ、闇に落ちた

気づいたら周りは火の海、燃え盛る火の中、逃げ惑う人々、

そんな中に、ひとりの影、なかなか顔が見えない、顔にはとげとげしい赤い痣見るだけでも痛々しい、金色の刺繍が入った黒い和服、赤と紫の帯、その姿にはどこか艶やかな姿、ただどこかに悲しみがある

「キャアー！ 厄災の姫よ！」

「皆のものを逃げよ！」

なにやら逃げている人々、刃が、紅く妖しく光った刀をもった影は刀を振り上げたそれを振り下ろした瞬間直後大地を切り裂いた

それと同時に、俺の意識は飛んだ

「・・・・・・・・ぶ！」

「・・・・・・・・だいじ・・・・・・・・！」

かすかに声が聞こえてくる、それはやがてはつきりとしたものになり

「ねえ、大丈夫？」

初めてその子の声が耳で聞こえた、かわいらしくて聴きやすい

「あっ、うん」

何がなんだかわからない、ただ、目の前の子を泣かせちゃダメだとは思った

「痛くなかった？」

「少し痛くて、怖かったかな？」

額からは大量の汗が吹きこぼれていた
そんな俺をみて、再び頭を撫でてくる

「もしかして怖かった？」

「正直言うとな、まあこの世がこの世だしね」

「かわいいね」

「そりゃどうも」

彼女は可愛いといったが彼女も十分可愛かった

「お名前は？」

「うゝん」

少し考え込んだあと

あかはなよるひめ
「紅花夜姫」

俺は驚愕した、目の前にというか膝枕しているのが、赤き夜の厄災の姫、そう自分の家系で最も恐れられており、早朝封印しようとしていたものだったということだ

そして、驚愕したのが、これほどまでに美しい人だとは思わなかった

「なんか知ってるの？」

「うん、ああ・・・」少し怖がってしまう

「怖いのか？」

「いや、怖くねえな」

「：どう、して：？」

「ばっかばかしい。理由なんていらねえだろうが、別に特別なことなんざ何もねーよ。俺の本能がたった一言、この俺に向けて言っただけだ

こいつを助けて、守ってやれってな」

「そんなこと、どこで言えるの？私、厄災の姫って呼ばれてたんだよ」

少し涙をながしそうになる夜姫あひめ

「どこって、そりゃあ決まっていますよ

——心に、決まってるんだろ」

俺は夜姫に対してそういった、途端

ドサッ！夜姫が俺に覆いかぶさるように倒れてきた

「あなたを信じていい？」

「もちのろんだ」

その途端、花のように綺麗な赤い光が二人の周りを包み込んだ
それは、二人が固い絆で結ばれた証だった
そして、夜姫の服が経帷子キョウカタビラからあの夢で見た金色の刺繍が入った黒
い和服、赤と紫の帯になった
夢の中で見るより何倍も艶やかさが強調されていた

「いくよ」

「ああ、もうひとね寝させてくれ」

ズテンッ！壮大に夜姫がコケた

その日、早朝

ズテンッ！ 壮大に夜姫がコケた

「どうかしたのか？ まだ夜だぞ？」

「うーん・・・あのさあ？」

「なに？」

「KY？」

「うるせえ！」

性格が変わっている時以外、こんな感じ、といっても誰かがカツコつけようとしたらそれを尽く潰してしまうのが俺である

「ねえ」

ゆさゆさと体を揺すってくる

俺はここまでできて気づいたことを打ち明けてみた

「あのさ・・・もしかして御守^{みかみりよう}霊？」

「うーん、惜しいね、妖怪と幽霊のハーフみたいなものだよ」

「だから、実体化できてるの？」

「そゆこと、わかってると思うけどフツ^{みかみりよう}ーの御守霊は触れないの知ってるでしょ？」

「ああ、だてに生きてませんから」

「まあ、特殊なのよ、特殊」

何が特殊なのかさっぱりわからないが、そんなことは気にせず

「ふーん」

そう言いながら俺は目をつぶる、それからもうひと寝し始めた

チュンチュンチュン・・・

山の西あたりから太陽が登ってきた、その日差しと小鳥の鳴き声と何といっても

「暑い・・・」

それが、現状を表す唯一の言葉だった。

「……30度は、あるよな」

「そーいや天気予報の○純さんが”明日は30℃超えます”と言った気がする

何だコレ！？真夏の猛暑日並じゃないか！！

というか、真夏なんだけどな！つーか、夏だよ！チキショー

俺は服を整えながら、その場でホコリを叩いて、山を降りた

「どこに行くの？」

「あゝ実家」

「家？」

「そんなところ」

「そうたわいもない話をしながら山を降りていく

「そーいやさ、夜姫さん」

「なに？」

「俺は君のことをなと呼べばいいかな？」

「うゝん」

「少し考える夜姫、そして

「夜姫でいいよ？そっちのほうが気楽だし、それか”ヒメ”でもいいよ」

「わかった」

俺は微妙に納得する

「んじゃあ、私も君のことヒロって呼ぶよ」

「OK、俺も気楽だわ」

「そーいうと、俺は少し周りに気を配りながら、歩いていく

「ねえ、ヒロ？」

「なにヒメ？」

「言っていない？」

「いや、言わなくてもわかる」

多分、俺と夜姫が思ってることは一緒だと思った

「（なにかがおかしい）」

そう思いながら当たりを警戒しつつ、山を降りていく

「ヒメ」

「うん」

そういうと、俺の体の中に入っていく、夜姫

幸い、本家には今日、儀式を行う面々が大広間に揃っていることが告げられ、俺は急ぎ足で大広間に向かった

「ああ、遅くなってすいません、かがみひろみち篝纏弘道ただいま戻りました」

「おお、私の予定していた時刻より、30分も早い、明日は槍が降るのお」

なにやらがっかりというかなんというか、とりあえず馬鹿にされた気がした

「珍しい、弘道が時間の30分前にくるなんて」

驚愕した表情の明美姉さん

「まあ、皆のもの揃ったみたいじゃな、さて、行くとしようかな」

そういうと、頭首である叔父さんは立ち上がり、とても80歳とは思えない足取りで、儀式をするための祠に向かった

それから、順調に進んでいた山道に突如獣の咆哮が木霊した

「……皆のもの、よいな」

当主がその場で指示をだす

ガルルルウル！現れたのは熊が異常変化した生物

見上げるような体躯、全身縄のごとく盛り上がった筋肉、頭の両側から耳が変化し熊では異常な太い角がそそり立っていた、目は狂ったように赤く輝いており、その姿は熊ではなかった。

ここにいる俺でさえもビリビリと振動が伝わってくるほどの雄叫びを上げる

「異獣じゃ、明美、美雨任せる！」

「「あいよ！」」

そう言いながらも叔父さんは山の祠に向かって、颯爽と走り抜けていく、それと並行して、横を通っていくほかの人たち

「んじゃあ、明美姉さん？」

「美雨も」

「「いっちょやりますかあ！」」

そういうと戦闘態勢に入る二人

人間と御守^{みかみりよう}霊が交わると、どうなるか、それは簡単なことで、御守^{みかみり}霊の一部能力を人間が使うことが可能で、信賴関係によって攻撃力とか使える技が変わる。

しかし、一歩間違えれば、人間が御守^{みかみりよう}霊と同化してしまうこともある、そうなるとほぼ死に近い状態になる

美雨姉さんと明美姉さんは互いに焰龍と氷龍の姿をまとっている

焰の柱からでてきた美雨姉さんは焰のように赤い和服

氷の柱の中からでてきた明美姉さんは氷をそのまま表現した青色のドレス

二人とも、武器はもたないずに、普通の攻撃用の術で異獣に対抗し始めた

「ゆけ！氷槍！」

「暴れな！焰鎖！」

それと共に、二人が攻撃を仕掛ける

片方の焰鎖は、左から異獣化した熊の動きを封じ、右から明美姉さんの氷槍で熊にダメージを与える

「堅い！」美雨姉さんが少し苦しみながらも、攻撃を続けながらさういう

「美雨！焰鎖で止めて！確実によ！」

「あいよ！」

さういうと再び熊を鎖で巻きつけ、再び動きを止める

それと同時に明美姉さんは呪文を唱え始める

「連なり穿て！」

さういうと一直線に槍が並び、それが連続して氷槍が放たれた

「これでFinish！」

さういうと、鎖と槍のコンボで熊に最後の止めをさそうとしたとき

グルアア！熊の咆哮が木霊すると同時に熊の反撃が始まった

世界に抗う力

グルアア！熊の咆哮が木霊すると同時に熊の反撃が始まった

熊は美雨姉さんと明美姉さんの止めの一撃を軽く受け流し、鎖で攻撃した美雨姉さんを地面に叩きつけた

「美雨姉さん！」

俺は美雨姉さんに駆け寄ろうとしたとき

「キャアア！」

明美姉さんも熊の腕で吹き飛ばされる

「二人とも！！！」

俺は二人に駆け寄る

「来ちゃダメ！」

明美姉さんに制止させられる

「（どうして、二人が！？）」

県内でもトップ10の二人が熊の異獣に劣勢を強いられている、普段なら普通に最後の止めで終わっていたはずなのだが今回はなぜか違う

「まさか、上位異獣！？」

頭のなかで浮かぶのはその言葉、しかも、その意味は、異獣より強い異獣・・・それは何かの影響を受けて生まれるはず、つい先日ものことがニュースで取り上げられてたと記憶をさぐる、勝てるとしたら、姉貴たちで精一杯のはずだが何かが違う
刻一刻と上位異獣の熊にやられていく二人

しかし、現状太刀打ちできるとしたら、今俺がここで夜姫の力を借りて戦うしかない、しかもそれが太刀打ちできるかどうかすらわからない

（こんな負け方ってありかよ……！ 何されたかも分からないで、負けるなんて……！）

滲んだ視界の中で何条もの閃光が交錯する。

（何で、何で俺はこんなに弱い……！）

『ねえ？ ヒロ』

「なんだよヒメ？」

『私を誰だと思っているんだね？』

「ヒメだろ？」

『そうね〜というか、わかってるでしょ？』

「デメリットが大きすぎやしねえか？」

『大丈夫よ、なんとかなるさ、それにあなたには資質があるのよ』

「資質？」

『あんまり込み入った話は出来ないけどあなたの体の中には私の破片が入ってるから問題ないよ』

「あの時のか？」

『そゆこと、安定してるしいつでも行けるわよ』

「……面白い。愉快に素敵にビビらせてやろうかな」

俺はできるだけ波長を合わせるため、何も考えないようにする、その隙をねらった熊が俺に攻撃を仕掛けて地響きを立てながら猛烈なスピードで走ってくる

「逃げてええ！」

くまの攻撃が俺に当たる直前、爆発的な紅い光が放たれた。人どころか、一般家屋程度なら軽く飲み込みそうな大きさの閃光、空に禍々しくも華がある赤い柱が貫き、その経過は、夜姫との共鳴融合^{ロードイング}を意味していた

自分の中から現れた荒れ狂った靈力の流れは焰のように燃え上がり、自分を取り巻いた。莫大な怨念を伴った光が地表を走り、宙に跳ね上がって空にさらなる光条を生んだ

現実が壊れていく感覚がする、人が人ならざるものの力を手に入れたように

『全テノ存在ヲ喰ラエ！』

脳内に再生されるのは人々の怨嗟に満ちた叫び声、それは夜姫が過去に言われてきた言葉の数々

その言葉と共に、一気にどこかに飛ばされた

その中から、現れたのは漆黒の長いロングヘア、大きな真紅色の瞳が神々しい光りを放ち、小ぶりだがスツと通った鼻筋の下で、桜色の唇が鮮やかな彩りを添え、スラリとした体を上は黒を下は灰色を基調とした和服風戦闘服姿になった。

「いくら、その状態のヒロちゃんでも無理よ！」

「精々、時間を稼いでくれればその間に回復して、私たちが倒すんだから」

「ああ。時間を稼ぐのはいいが―別に、アレを倒してしまっても構

わんのだろう？」

「いつからたくましくなったのよ？」

「さあな・・・守るもんができたからじゃね？」

「背伸びしないの」

「ああ、まあ、自分の中の期待に答えるのでしょうか」

「＃％！&\$・（○）U”∥（＃・HJKHUIODL＋、
∞＋」

この世界の人間が認識できない言語で何かを唱える

右手を広げ前に突き出す

「――勝てばいいんだろ・・・いや、殺せか――」

少年は、内なる何かに全てを任せ、一気に足にどこの流派にも見ない術式を展開する

「厄災術式」

足の加速術式が唸りを上げる

「――通常参之型――翔罰！」

前に倒れ込むように右足で地面を蹴飛ばし、しかし弾かれた様に全身を蹴ばした。

禍々しい紋章の浮いた拳を一気に上位異獣にぶつける、しかしそれを受け止め

やや据えた目で表情で責めていく、踏んだ右足を軸に、体を左から右前へとまわし、拳を異獣にぶち込む

漆黒の長い髪を靡かせながら、殺戮の焰を全身に纏いながら敵を追い詰めていく

右後に傾けた体を利用し、右足を外に、左足を前に踏み込む
グルアア！無鉄砲に異獣が突っ込んでくる

「歯を食いしばれよ、熊やろう！——」

「——俺の拳は、ちつとばつか痛いぜえ！」

まずは一発、熊の腹部に命中する

自らの拳撃と異獣の拳撃がぶつかり合い音楽のように奏でていく

なぜかわからないが、反射的に自分の身体をどう犠牲にするかのダメージコントロールが判断できる

連動による高速攻撃に頼ることはできるが、防御に頼ることはできないため

「式之型―障防」

瞬間的に、先程の術式と同系統の防御術式を展開する

熊が怯んだ隙を逃さず、高速移動と拳撃の攻撃を繰り返す

「さて、終了だ―術式——」

何の型なのか、技の名前も告げず、熊の地中からエネルギーの柱が熊を焼きこころした

そんな中、ひとひらの木の葉が地面に落ちたことを俺は逃さなかった

連続二回戦

「おやおや、まさかここで見つかるわ、それに気づいていたのでしょう」

若い男性と思わしき声があたり一体に響く、それと共に直感で心の中
の警鐘音が響く

今ここにいるのはひとりの若者とひとりの青年
右腕の手の甲には御守霊使いの証である紋章

木の葉が散る音と地面に足が付く共に金髪の白い服を纏ったその男
は現れた

息を吸い、はつきりとした声でこういった

「どうも、天獄流所属、一般奏者、蟻藁一郎です、今回は危険分子
の排除に参上しました」

鋭い視線でこちらを見る男性

ガチャッ！

「霊装展開」

そういうと鎌を持った武装になるその男性、その武器で後の二人を
指し

「いいところでですね、この状況下であればあの2人が死ぬことにな
っても問題ありませんね個人的には惜しい人材ですが今後の未来の
ために消えてもらうことにしましょうかな」

俺はただ無言でその場に佇む

「それに今の世界なら事故死として処理してくれるでしょう、なの
でとりあえず、貴方から、消えてください！」

高速で移動したことを告げる風とともに直後、真紅色の閃光と金色の閃光が激突した

戦闘授業なら、ある程度でならったことはあるが、それも精々護身用だ、そんな戦闘用の一般奏者が一般人を殺す野などたやすいことだ

「（これは・・・なんだ？）」

直感で体が動いてる感覚、思考がもの凄く冷静になる、自分の意志ではない動きになる

無意識というか、半ば体をのっとられた状態だ、何もいえない状態の中、唇が動き

「靈装―零^{ぜろ}の焰^{ほむら}」

そういうと、右手には黒い炎、左手には黒と白の吹雪の結晶が現れ、その中から一本の鋭く黒い槍が現れた
それを携え再び戦闘を開始する

聞こえるのは金属と金属がぶつかり合う音、自分が打つ音もあれば弾かれる音もする

上下左右の混撃が高速で繰り出される

槍をバトンのように使いまわし、攻撃と牽制を同時に行う、そして、距離が開いたら一気に詰める、そして弾かれたら逆方向から武器を回し、攻撃を切り替える、そして、石突と穂先を使い攻撃回数を二倍に跳ね上げる

「（――速い）」

相手も、十分速い、しかしこっちなぜか速い

こっちは、動作数を詰め純粋な速度の向上を図る

既に両者、擦過や薄い切り傷により、朱の色をとばしている

高速戦闘の中で一郎は思った

「――丁寧すぎる・・・こんなデータないぞ」

一般人相手にここまで梃子摺るとは思っていなかった一郎、戦術も丁寧でとても一般人とは思えなかった

すぐさま、速度を上げこちら側に攻めてくる一郎、そして、身を捻るようにして槍に飛び込む

「しかし、甘いです！」

その言葉と共に、右肘うちからのバックバンドで鎌の石突部分を叩き込まれた

骨を折る、木枝を折るような乾いた響きと肉を打つ湿った音が響き、弘道を吹き飛ばした

十数メートル、吹き飛ばされ、たなびく黒髪と手に携えていた零の焰と共に地面を削った

「（ははは・・・殺されちまうのかな？）」

目の前にいる一郎が俺たちを殺す準備を始めた

「（死ぬのか・・・嫌だなあ・・・）」

走馬灯があたりに走る

その時、ゆっくりとゆっくりとまるで蟲が俺の体を喰っていくかのごとく赤い紋章が俺の体を這っていく

「（厨二だな・・・って言ってる場合じゃないか）」

影のようにゆらりと俺は槍を携え立ち上がる

「まだ抵抗するのですか？おとなしくそこで寝ていればいい夢が見れたものを」

「すまねえな、まだ倒れるわけにはいかないのだよ」

「わかりました、ではすぐに止めをさすのでしょうか？」

「やれるもんなら、やってみろ！家族を誰一人殺らせてたまるかあ
あ！」

そういうながら、さっきとは違うパターンで攻撃を行ってくる一郎、
そんな中で

「（――遅い・・・）」

一郎は、さっきとの違和感を感じる、それは格段に攻撃の狙いに正
確性が備わったことを意味していた

「（動きが変わった!）」

その異変と共に、一気に速度を上げる一郎

広場に風と火花が散る

それと共に、音の響く数が先ほどの十倍にも跳ね上がる

「面白くなってきましたね！」

その声と共に、広場に残像が現れた、攻撃回避防御を行う弘道とそ
れに対応するように動く一郎、風と金属音の響きの数だけ広場を埋
めていく

どちらも、正面からぶつかりあい、互いの背面を取り合う

速度が上がりにあがってもはや止まらない状況まで上がっていく

2人とも攻撃の精度を上げ無駄をなくし、迷いのない攻撃をぶつけ
合っていく

「加速」
アクセル

弘道からその言葉が漏れると共に弘道の見てる世界が加速する

「追いつかれた！」

その刹那、数十発の斬撃と攻撃が一郎に来た

「この・・・厄災の元凶がああ！」

奇声と共に鎌を振り上げ狂気のような絶叫と共に何の躊躇いもなく
鎌を振り下ろしてくる一郎

ザッ！刹那の瞬間、一郎の腹部を氷の槍が貫いていた

心の中の葛藤と怒り

「・・・」

それと共に、俺の体から、気が抜けどつと、汗が噴き出した、それと共に、体から何かが離れた感覚がする

それと同時に、人を殺してしまったという罪の意識が生まれたが

「（正当防衛・・・ってことでいいよな）」

弘道は心の中で踏ん切りをつけた

「ふう・・・」

片膝をつきながら自分の意識が疲れて飛ばされないように必死になぎとめる

「なんとかあったかな？」

「さすがね」

隣に夜姫が現れる

「そりゃどうも」

ゆっくりと立ちながら俺は二人の姉に応急処置を施す

「あらら、私たちやられちゃった・・・」

美雨姉さんが少し疲れた声でそういう

「ヒロ、聞きたいことは山ほどあるけど、申し訳ないけど運んでくれる？」

二人とも少し一人ではうごけそうにない

どうやら儀式は滞りなく行われたそうだが、俺は完遂されたことを確認し二人をいっぺんに運ぶ

美雨姉さんを背中に、明美姉さんをお姫様抱っこする

「さてと」

ちよいと疲れていたが日々の努力もあって、そんなではなかった

姉さんを本家に運び、俺らの寝部屋に寝かす

「ふう：やっぱり落ち着くわね」

そういいながらゆっくりと目をつぶる二人

「少し、休んでろ」

「えっ？ うん」

少し赤らめた顔になる二人

「ヒメ」

「なに？」

ヒメが相変わらずの和服姿で現れた

「この二人頼めるか？」

「見張ってればいいの？」

「ああ、少しおじさんのところに行ってくる」

そういうと、真剣な顔をして

「死なないでよね？」

「おいおい、話し合いの場で死人がでるなんて世も末だな」

「ふふっ・・・」

そういうながら俺は大広間に向かった

「・・・」

「・・・」

「・・・」

広間は厳かな沈黙に包まれていた

その中で一言口をあける頭首

「篝火3姉弟がけがを負った」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

相変わらず沈黙する

「なあ、御館様、少しいいか？」

頭首から少し遠くにいた分家の男性がいう

「篝屋家は姉妹のはずだが？」

「ああ、その件についてじゃが・・・」

少し口を濁しながらバツの悪そうにこういった

「めんどくさいから3姉弟にした、だって、もと一緒でたんじゃろ？だからじゃ」

その途端、その場にいた全員が納得した

「（おいおいおいおい！）」

一人ものすごく納得していなかったが、それはスルーするとして

「それと」

一気に広間の雰囲気が変わる

「これはあくまで、私を感じたんじゃが、術を行う時に手ごたえがなかった、意味わかるなじゃろ？」

広間がよりいっそう、重くなる

「御館様、解き放たれたということは？」

「無きにしも非ずじゃ、もしくは消滅したか」

「ですが、もし解放されたとしたら、ここいら辺一帯になにか起きているのでは？」

「その可能性はおおい、可能性として篝屋姉妹が襲われたのが例の件に関連が無きにしもあらずじゃ」

「もし、解き放たれ、この一族にその使い手がいたとしたら」

広間がざわめき立つ、それもそうだ、武州でも珍しい、怪異調伏を得意とする戦闘系御守霊集団である篝火流、ある日、とある当主が死ぬ気で封印したとされる妖怪とされてる、それが解き放たれたとすれば篝火流を根本から揺るがすであろう

「そんなものがいれば、この本家の敷居を跨ぐとは考えられません、そんな奴がいれば里の恥です！」

言葉の礫が俺に間接的に飛んでくる

「力あれど、人間にはあらずだ！」

「我ら1000年の歴史を汚すことだ！」

「そんなもん処罰当然ものだ！」

「そやつは正統を汚すも者、破門以外にありえん！」

もし、それが本当ならいろいろな勢力にとっても目障りになってしまふ

聞くに耐えない罵詈雑言が、俺の耳に入る、俺は彼らの聞くに耐えない言葉の数々を耳にして憤りを抑えるのが精一杯な状態だった。

奥歯を噛み締めながら、俺は静かに聞く

そして、広間が不意に静かになる

「まあ、可能性の話じゃからな、各自警戒を怠らぬように、散会」

そういうと各自、与えられた部屋に戻っていった。

対話

とある海岸沿い

ひとりの猫背の中年のおっさんと大剣を背中に背負った女使いがそこに居た

「こんなところに、これ・・・？」

目の前にあるのは四角形を基礎とした模様

それを見たたん反射的に、柄に手を当てていた

「なあ、おっさん？」

「なんだ？」

「これって、終焉の紋だよな？」

「よく知ってるね？」

「そりやどうも」

空中を激音が走る

『――』山陽備防特別司令部”より全防衛ラインに通報！航空戦艦一艦、上空を通過――』

空をライトの明かりが照らし、それが来た

艦影。全長五百メートル級の大型戦闘艦が空に姿を見せた

「レーテアウルのエンブレム・・・！まさか、最新型！騎士の方舟パディア マルカ」

「違う、あれはレーテアウル軍、八魔天王のトップ、ディオス・ペガの艦船・・・おそらく、挨拶だ」

影は七つ、それぞれ、体格や身長も違い、髪なども違う陰影があり、目が赤く光っており、こちらを見下していた

おそらく、なにかしらの術式で姿を隠していたのだろう

「あれが、この星を制圧しようと動き出している八魔天王軍、レーゴッディアスエイト

テアウルが誇る、御守霊使い最強の騎士達だセブンスな、武州の騎士、七霊星タリーズがようやく太刀打ちできるってレベルの騎士軍団、この武州を取り巻く世界で、尖山中仁の四聖百魔とイングラスコッティア王国の Vie de engelia（栄光ある天使達）の上に付く、有名部隊・・・」

「こんな時になんで？」

「私にもわからない、けど何か動き始めているということだ」
パイプ煙草を蒸す男性

「へえ・・・平穏な世界は終を告げるってか？」

「そういうことだね？」

「武州政府が何かを隠しているってこと？」

「それか、気づいていないかだね？」

「気づいてない？なにに？」

「レーテアウルの八魔天王が出てきてるってことは、裏金って訳じゃないやなさそうだな」

「御守霊に関して？」

「その可能性はあるだろうな、それに、この国の三大基法、必要以上の戦力をもたないってあるだろう？」

「ああ、確かにあるな、それが？」

手に当てた柄をもどす、女使い

「この武州で封印指定されてる、九尾姫、闇之太陰、天照系御守霊、これらが解き放たれれば戦力が大幅に変わってしまう」

「けど、政府発表じゃ、解除されてないんだろ？それに何も戦力の増強ファンって御守霊に限ったことじゃないだろ、考えたかもねえが強化ムアーム——デイオシルフ魔神咆哮・災神の酒杯クイスクー——ディクチュウム霊装」

「その可能性はあるねえ、これはあくまで推測だが、伝説上の黒月の姫が解き放たれたとしたら？」

「・・・考えたくもないぜ」

「そういうこと、もしかしたらそれを防ごうとして、政府が内々に動き出したのかもしれない」

「けど、八魔天が来らマスコミが追求しないわけないだろう？」

「そこなんだよね、なんで騒いでないのか、あるいは政府が手を回しているかなんだよね」

「宣戦布告じゃないだろうな？」

「その可能性もある」

二人とも、海辺を眺めていた

怒りと葛藤

当主の口から散会の言葉を聞いた途端、面々は蜘蛛の子を散らすように広間を後にしていった

未だに、さっきの罵詈雑言が頭に残る、頭の中にモヤモヤしたのが残っている、とても不愉快な気分だ

ドサッ！ずっと気配を消していた夜姫が糸の切れた糸人形の様に膝をついて俺に抱きついてくる

その顔には、大きな目の目尻から大量の涙が宝石のように美しく輝きながらこぼれていく、悲痛な表情で喉を震わせて、今にも叫びそうな声で言ってくる

「ごめんねえ、ごめんねえヒロ」

こんな可愛い女の子が必死に俺のためを思って泣いてると、なんだかやるせない気持ちになってくる

俺の胸に額をつけ、しゃくりあげながら、彼女が俺の胸を力なく叩く

「大丈夫だよ夜姫、俺がここにいるから、謝らなくていい」

「どうして・・・！？」

「そんなの簡単だ、どっかの人はいった、救われぬものには救いの手を、なら、俺はお前に何があるうが救いの手を差しのべる、それだけだ」

「けど、あんな姿みてられないよお」

「涙を拭って前を見てくれ。胸を張って誇りに思えよ。ここにいるこの俺が、お前に死なれちゃ困ると思ってるんだ、」

「私たちは、生きてちゃいけない…」

「ふざけんな！」

俺は声を荒らげる

「誰がそんなこと決めたんだよ！」

お前らを認めねえって奴がいるんなら、俺がぶん殴ってやる！

そして、お前が泣き虫でちょっと悪戯好きの普通の可愛い女だっ
てことを

俺がわからせてやる！」

言い終えた途端、夜姫が俺を強く抱きしめてくる、抱きしめられれば顔が上に向く。

涙で濡れた目尻から、彼女の顔が来た。あまりの近さに目を伏せなすがままに任せると、

「――！」

唇を重ねられた、ゆっくりと俺の口内に夜姫の確かな舌が入ってくる、濃厚なディープキスだ

夜姫の気持ち収まるまで俺は自分の口内を夜姫になすがままにされた

「・・・！」

目をつぶっていた其の時、体の中に突如熱いものが生まれ体を焦がすようにそれが体全身に流れていく

「（熱い・・・！）」

けど、全身の力が抜けており、夜姫から抜け出すことができない
安心感と抵抗できない感覚が体を支配していく

ピュルルル！

口が鉄の味に包まれた

「（血！）」

アスナの舌がそれをゆっくりと取っていく

それが終わるなり、ゆっくりと離れていく

「えへへ。キス、しちゃった、それとごちそうさま」

夜姫のとても可愛い顔が俺の瞳にうつった

柔らかい手がそつと触れた頬には、赤い痣が現れる、それと同時に、あまりの圧倒差に俺は後退りしてしまう

「二人の証だね」

「エロいこというな」

「初なんだね？」

「・・・」

何も言えない俺

「オーバーロード 侵食始まっちゃったんだ」
「オーバーロード 侵食？」

そつと、俺の体に触れてくる暖かいて、とても厄災の姫だとは思わない

「これがね・・・厄災術式を・・・神様を殺した」

夜姫は、悲しそうにそう言った

「咎人の姿よ・・・」

夜姫は俺に静かに抱きついた、それにはたしかに重みがあった

「あったかいな」

「へんたい」

泣きながらも、そう言ってくる夜姫、どこか可愛さというかも手放したくない可愛さがある

「神様を殺した、それが、どうした？神様がもし死んでたらこの世界はもとともとねえよ、だから、神様は死んじやいねえ、だから、クヨクヨするなって」

見ているこっちが悲しくなってきた

御館様との対談

泣きながらも、言ってくる夜姫、どこか可愛さというかも手放したくない可愛さがある

「神様を殺した、それが、どうした？神様がもし死んでたらこの世界はもととねえよ、だから、神様は死んじゃいねえ、だから、クヨクヨするなって」

見ているこっちが悲しくなってきた

「お若いのお」

気だるそうな声で参上するのは白髪 of 男、篝火大和

いつの間にか開いていた襖障子から身を乗り出し、此方を伺っていた。

「（――全くその存在に気がつかなかった）」

「（……ヒメ）」

「（――ごめんヒロ。気配そのものが消えていたしこの今の状態では察知不可能だよ）」

「（先手を取られたか）」

「変態？」

「老人に言われても、困るのお」

明らかに鼻の下を伸ばしている当主

「弘道、彼女か？」

なにやら、当主のまづい方向の意味で目付きが変わる

「えっ！ ああ、ちよつとまてや！」

「いや、若い男女がイチャイチャしてればそれはもう、彼女としか言いようがないじゃろ」

「・・・（エロジジイ興奮してやがる、早く何とかしないと）」

対策を考えるため無言で黙り込んでしまう俺

「おや、ホントみたいじゃな・・・御二人とも、少し良いかな？」

雰囲気ガラリと変わる、頭首の背中では付いて来いと言っているそのものだっ

竹林の囲む中、里の中でも比較的外側に位置し、そこに至る道が一本しかないような目立たない場所、そこには今も昔も住む者もない古式床しい小さな空家がある、しかし、これまで人が住んでいなかったとは思えないほどに家屋や庭も綺麗に整えられていた

「まあ、入りなさい」

竹林に囲まれたこの場所は、里の中でも周囲の雑音から切り離された静謐な空間だった

こじんまりした小さな空家に連れられ、俺とヒメが隣合せて座りそれに対面するように畳一枚開けて大和が丁度正面で相対するように座布団の上に胡座をかくように座る。服装は先ほどとは変わらぬ着流しだ。

雰囲気がガラリと変わり、緊張した空気に変わる

「頭首、どのようなことで？」

「言わずともとは言い難いが、まずは祝辞からじゃ、御守霊使いになれたこと心よりお祝いしよう、おめでとう道」

「お褒めに預かり、光栄至極でございます御館様」

髭を弄りながら話を続ける頭首

・ ・ ・

「気づかぬとでも思ったか・・・弘道？」

途端、俺の額に冷や汗がたれ落ちる

「その痣、違うとは言わせんぞ」

鋭い目付きでこちらを見る大和、いかにもすぐ殺されそうな雰囲気だ

「契約したんじゃない、厄災のh「ヒメをその名で呼ぶな！」」

俺は声を少し荒らげてしまう

「落ち着くのじゃ、弘道、まだそれが悪いかどうか決まったわけじゃないじゃろ」

「ヒメは、ちゃんとした名前がある「真名を告げてはならぬ」」

俺は当主の声によって静止させられた

「大丈夫じゃ、落ち着け弘道」

そういうと、俺は下の正座に戻る

「ヒメ、と呼んでいる彼女じゃが、お主も分かっているであろうことじゃ」

「ええ、それは理解しています」

「しかし・・・」

遠くを見てこういった

「意外に、可愛いのお・・・」

場の雰囲気をご本人によって崩された

「真面目にお願いしますよ、御館様」

「まあ、そんなことじゃ、しかし、お主もすごいのお？」

「何がですか？御館様？」

「基本的にシンクロ率が高ければ触れられるではないか」

「ええ、」

「実体化しているなんて珍しいし、ここまではっきりと見えている

のはお主の何かのせいじやろう、これはあくまで推測じゃがお主の背が止まっていたのもこのためなのかとも思う、それに、15代当主篝火如月も主とおなじような御方だったからのお、しかも、感覚が正しければ侵食も止まっておるみたいじゃ、まさにベストカップルじゃな」

「（マジダメだ、頭にエロしかねえ、このジジイ、ベストカップル、おいおい、頭首公認の仲なんて・・・）ええ、ああ・・・」

そう思うと隣に座っていたヒメが

「カップルでゝす」

左腕をつかんで自分の体を寄せそうだった

「ちょいまってや！STEP！STEP大事にしようね！」

つつこまなければ気が済まないレベル

「おほほ、若きことはいいいことよのお」

そういうとあるものをこちら向けて投げる

「これは・・・？」

投げられたものは一本の鞘の中に入った刀

刃がもうすでに錆びた刀

「なあ、錆びてるけど？」

「ああ、その刀はすこしいわくつきでな」

「んまあ、ありがたくもらっておきます」何も言わず答える俺
「頑張るのじゃな」

ここにある刀と言え、ただ一本ある。もし、今の状態でなければ国宝級であった刀で、闇鴉、百鬼丸、封絶の剣、村正、と並ぶもと裏天下五剣であった刀の一つ名前を天斬宗光刃長二尺六寸五分はば

き元にて約一寸、横手にて約六分半、重ね二分。造り込みは鎬造、庵棟。腰反り高く小切先。地鉄は小板目が肌立ちごろとなり、地沸が厚くつき、地斑まじり、地景しきりに入る。刃文は小乱れで、足よく入り、砂流し、金筋入り、匂口深く小沸つく。帽子は小丸ごころに返り、掃き掛ける。茎は生ぶ。先は栗尻。鑢目は切。目釘孔1つ。佩表に「宗光」二字銘を切る。制作は平安時代後期とされた刀、斬れ味に関して、江戸時代に篝火家13代目当主篝火総満という剣豪が、当時、死人が蘇る門の門番で、当時異界より襲ってきた異獣の大軍勢相手に振り下ろしたところ、異獣を切断しただけではなく刃が門の中まで達した、という逸話が残っている、それ以降、厄災を立つ刀と言われていたが、武州歴1600年石山の戦にて使用者がその圧倒的な妖力に取り込まれ戦場を敵味方関係なく血の海に変えたため、以後厄災の刀と呼ばれた刀一本のみである

「・・・そういや、お主思ったのじゃが？気づいておらんのか？」

「なにがでしよう、御館様」

「フオフオフオッ・・・かわいらしくなったのおお主」

前々からもそして今も、よく周りの連中から容姿のこととでかわいいと言われていた。なぜ、男の俺である俺がかわいいと言われるのか、俺的にはかつこいいのほうの数倍よかったのだが、生憎そんなことは過去16年間一度も言われたことがなかった。

「はあ？」

俺は今まであった事象全てを考察し始める

そんな中、当主大和が煙のようにその場から去った

「・・・まさか！」

そのとき、俺は頭の違和感に気づいた。俺はそっと自分の髪に触れ

てみる、恐る恐る髪の行き先をたどっていくと、それは肩までであった。その中の髪を自分の目の前にもっていく。髪は、ガサガサでなくつややかさがあつた

そう——俺は今の自分の身体のラインを確認した、どこか男のようで女でないよくわからないライン十ここに来てようやく喉違和感を感じた、それは自分で発声することで始めて現実のものとなった

「・・・ハア」

ちよつと、喉を震わせて声を出すとまったく自分の声じゃない女っぽい声が聞こえる

「（よし、落ち着こう）」

素晴らしいながら自分の胸にそつと手を当ててみる

「（なかったことにしよう、そうだそれがいい）」

素晴らしいながら、俺はついさっき起きたことをなかったことにした

そして、俺はある結論に至った

「・・・女化してる？」

俺は根源を問い詰めるべく

「なあ、ヒメ？」

俺は終始？無言だった夜姫に話しかけ

「ッ！！」ブシュッ！

俺は壮大に吹き出した、なぜなら先程の和服姿ではなく、なぜか、姉が来ていたであろう服を着こなしていた。

白のTシャツに、ホットパンツに半袖で白のフリースが入った腰までしかない黒のジャケットにより、女らしくもかっこよさが引き立っていた、そして色々な意味で視線が宙に泳いだ、

「（やべえ、・・・俺より服のセンスいいやん）」

「ねえ〜ヒロ〜着てみたよ〜」

はしゃいでる夜姫

「おお〜流石！（直視が悩まれる）」

挑発しているとしか言いようのない？服装、これで街をあるいたら
そっこうで絡まれること間違いなしな服装だ

「ねえ〜外行こうよ！」

「ッ！！（速攻かい！）」ブシュッ！

もはや考えると余裕を与えてくれないらしい

「もしかして、私のことで悩殺？されちゃったのかな？初だね〜」
そう言いながら俺の周りをまわり、挑発してくる

「俺の頭がお前のことで脳（悩）殺だわ」

「いや〜悲しいときは慰めてあげるよ〜」

卑猥！卑猥！

「危なそうなので遠慮」

とりあえず断つといた、何されるかたまったもんじゃないからな

「ねえねえ〜暇だし町行こうよ〜」

「ああ〜ここいらへんだとそんなないぜ？」

「ありゃ〜」

「ってか、よく知ってるんだな？」

「う〜ん、読み取らせてもらったよ」

「俺の脳をか？」

「そゆこと〜」

「（筒抜けってわけですか・・・）」

そんな中、あの二人が現れた

「ああゝいたあゝ」

ちよっとフラフラしてる美雨姉さん

「おい、美雨姉！寝てなきゃ！」

俺は慌てて美雨姉さんの近くに駆け寄り、介抱する

「ごめん、ちよっと頼みたいことがあってね？」

「なんすか？行ってきましたけど？」

「うん、申し訳ないんだけど、街に行ってきて買い物してきてくれない？」

「何をですか？」

「とりあえず、これメモだから」

そういうとなにも聞かないでというノリでメモを渡してきた

俺は咄嗟にやるべきことを確信し、部屋まで送っていく

「んじゃ、いってきます」

そういうと使っではいけない厄災術式で、姉さんたちが俺が留守にしている間何かないように結界を貼っておく

「ヒメ、街行くぞ！」

「うそ！！ヤッター！！」

子供のようにはしゃぐ夜姫だった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6786z/>

現実の王冠

2012年1月15日09時53分発行